

村上春樹「中国行きのスロウ・ボート」論

— 80年代までの〈中国人〉に対する〈記憶〉変遷及び原因分析 —

呉庭

要旨

ここ数年、村上春樹は中国においてほかの国が比べものにならないほどの愛読者を持っている。作品としては〈中国〉を題材とする作品が少ないうえ、〈中国〉にもあまり関心がなさそうである。それにもかかわらず、村上の「周り」は〈中国〉と緊密に関連している。村上の初期の文学作品には〈中国〉にどのような「認識」があるのか、という問いに対する考察が村上文学の研究に役立つのは言うまでもない。本稿は、村上の最初の短篇小说・「中国行きのスロウ・ボート」を中心に、語り手「僕」と村上の関係を明らかにした上で、80年代までの〈中国人〉に対する村上の〈記憶〉変遷を考察し、またこれに伴う原因を分析していく。

キーワード

村上春樹 中国 スロウ・ボート 記憶

1. はじめに

世界中で中国ほど多くの村上文学の愛読者を持つ地域はないだろう。村上春樹は、『風の歌を聴け』（1979年）でデビューして以来、数多くの作品を執筆してきたが、作品の中で中国は直接的に扱われるどころか、間接的に扱われることも少ない¹。村上文学はアメリ

¹ 中国人（華僑）が登場人物の一人として「鼠三部作」での「僕」友人のジェイ（『風の歌を聴け』（1979年、「僕」はジェイに「僕の叔父さんは中国で死んだんだ」という内容を述べた。）、『1973年のピンボール』（1980年、ジェイは、自分が飼猫の片手が誰かに潰されたことを語っている）、『羊をめぐる冒険』（1982年、ジェイはジェイズ・パーのバーテンダー））と『アフターダーク』（2004年、19歳の中国人娼婦郭冬莉が日本人に殴られたことなど）での郭冬莉。一方、比較的にはっきりとして中国に関連する内容は含まれた作品は『ねじまき鳥クロニクル』（1994-1995年、満州国付近での「ノモンハン事件」にかかわる作戦

カ文化に深く影響されていると言われるが、村上が大学に入学する前までに暮らしていた西宮、芦屋、神戸の周りには、在日中国人が多く暮らしていた。村上は、現在までに1度だけ中国へ行ったことがあるが、これは「戦争」の研究のためだけである。2019年5月、『文芸春秋』に掲載された村上の「猫を棄てる——父親について語るときに僕の語ること」によると、村上の父は第二次世界大戦中、中国大陸などへ3回にわたる召集を受け、出兵したことが明らかになった。村上が中国に特別な感情を抱いているのもこれと繋がるに違いない。毎朝の朝食前に、菩薩を収めたガラスの小さなケースに向かって「長い時間、目を閉じて熱心にお経を唱えていたこと」という習慣は「一日たりともその「おつとめ」（と父は呼んでいた）を怠らなかつたし、誰にもその日々の行いを妨げることはできなかった」²と語っている。さらにその習慣は、村上の父が「前の戦争で死んでいった人たちのためだと。そこで亡くなった仲間の兵隊や、当時は敵であった中国の人たちのためだと」³の「おつとめ」であることがわかる。生まれてから18歳まで家を離れなかつた村上にとって毎日そのような光景があったことにより戦争や中国に対する心情は複雑ではないだろうか。また村上は中華料理が嫌いということもある。そのような中での村上は、中国にどのような認識・印象を持つのか、これは村上文学研究にとっても重要なことである。村上文学の初期に、「中国行きのスロウ・ボート」⁴という作品がある。この作品はタイトルに中国が入っており、さらに内容にもよく中国人のことを登場させている。自らの第1の短篇集の表題に同作のタイトルを使用したことから、村上は「中国行きのスロウ・ボート」に対する特別な執着心が伺える。村上は「自作を語る 短篇小説への試み」にも「そのような補修工事（1990年、短篇集「中国行きのスロウ・ボート」などに対する改稿——引用者注）のあとで思うのだが、僕という人間、つまり村上春樹という作家のおおかたの像は、この作品集の中に既に提出されている。」⁵と述べた後、「僕の世界というもののありようは未完成なりに、ぎこちないなりに、バランスが悪いなりに、この処女短篇集におおむね提示されているように思える。スタイルなり、モチーフなり、語法なり、そういうものの原型はここに一応出揃っていると書いていいのではないかと思う」⁶という内容に続い

行動、中国人虐殺などの内容）と『騎士団長殺し』（2017年、継彦が20歳に徴兵で中国へ配属され、「南京大虐殺」に無理やり加担させられたことなど）。

² 村上春樹「猫を棄てる——父親について語るときに僕の語ること」（『文芸春秋』6月号。2019年5月、242-243頁）

³ 同2。243頁。

⁴ このタイトルは、1948年にフランク・レッサーが作曲し、ケイ・カイザー楽団がヒットさせ、ミリオンセラとなった曲である。村上は、テナー・サクソ奏者のソニー・ロリンズの演奏が大好きで彼の演奏により、知ったのである。英語で表記すると、On A Slow Boat To China。

⁵ 村上春樹「自作を語る 短篇小説への試み」（別刷）『村上春樹全作品1979-1989③』（講談社1990.09）。III頁

⁶ 同5。IV頁

た。村上自身が語ったように、自分の作家としてのおおかたの像も自分の世界というもののありようもその短篇集に提示されているということである。それでは、村上にとって「おおかたの像と自分の世界」の1つである〈中国〉はどのようなものだろうか。

2. 底本について

「中国行きのスロウ・ボート」は、村上の処女短篇小説集⁷の中に収められており、この作品は村上にとって最初の短篇小説である。当小説の初出は、1980年文芸誌『海』4月号（以下初出誌版と略する）である。1983年5月に中央公論社から、ほかの6つの短篇と共に単行本として改稿したのち、『中国行きのスロウ・ボート』（以下単行本版⁸と略する）にまとめられ刊行された。そして1990年9月、講談社により『村上春樹全作品1979-1989 ③』（以下全作品版⁹と略する）にも収録されているが、「かなり手を入れた」と語っていることから、再度改稿があったことが分かる。また村上は「自作を語る」短篇小説の試みで自分がなぜ改訂を加えたかという理由を語った後、「今の時点から過去の自分自身に手を貸すということである。」¹⁰という補足がある。山根由美恵氏も「中国行きのスロウ・ボート」に関しては、改稿によって作品の主軸が変わったのではないかと、つまり、〈記憶〉の捉え方がより鮮明になり、中国が特権化されたことにより、先行の論が指摘してきたテキストの戦略や〈自己化作用〉では捉えきれない部分が加わったのである。¹¹と締め括っている。また「なるべくオリジナルの雰囲気を変えないように細部の交通整理をしたつもりだが、やはり少しは色あいに変化したかもしれない」¹²と村上も認めたように、1980年の初作と改稿した後の1990年の作品は変化したということである。それらにより、1980年発表された「中国行きのスロウ・ボート」はある意味で1990年、新たに作られたと理解してもよい。本論で使用する底本は1990年に改訂された全作品版に収録されている「中国行きのスロウ・ボート」である。

⁷ 1980年4月から1982年12月まで発表された七つの短篇。年代順に列举すると、「中国行きのスロウ・ボート」、「貧乏な叔母さんの話」、「ニューヨーク炭鉱の悲劇」、「カンガルー通信」、「午後の最後の芝生」、「土の中の彼女の小さな犬」、「シドニーのグリーン・ストリート」。

⁸ 短篇「中国行きのスロウ・ボート」に対して主人公たちの会話、「僕」の心境など書き換えがある。

⁹ 山根由美恵「中国行きのスロウ・ボート」『村上春樹 作品研究事典（増補版）』（村上春樹研究会編 鼎書房 2007.10 124-125頁）によると、以下五つの大きな相違点が挙げられる。1、中国人小学校に行つた〈僕〉が最後に落書きした結末の削除。2、中国人女子大生の性格が多く描かれ、より人間味を増す。3、中国人女子大生に対する〈僕〉の態度は若い男性にありがちの傲慢さが加えられる。4、〈僕〉もセールスマンも意識的に〈記憶〉について語る。5、〈僕〉が行けない場所にニューヨークなどが挙げられていたが、中国のみに限定。

¹⁰ 同5。

¹¹ 同9。125頁。

¹² 同5。V頁。

3. 先行研究

青木保氏は、「中国行きのスロウ・ボート」の中で「僕」が3人の中国人と出会った時期、場所など述べた上で「ここまでくると、読む側にとっては、中国人のことはもうどうでもよくなってしまって、語られようとするのは六〇年代から八〇年代へかけての「僕」の辿った道筋の里程標であることがわかる。」¹³と論じている。そこから中国のことを無視するように「六〇年代から八〇年代へかけての「僕」の辿った道筋の里程標」という中国と関係ないという年代に目を向け、「僕」にとっての意義を承認し、提示していることがわかる。また、川村湊氏も「ここに現われる三人の中国人——中国人小学校の教師、女子大生、百科事典セールスマン——との出会いが、それぞれ一九六〇年、七〇年、八〇年前後というふうに十年刻みであること（むしろそれは“七〇年”を中心として、その前史と後史だ）に僕たちは気づかざるをえない。」¹⁴というだいたい同じような「10年代史ごと」の考えを出している。

一方、山根由美恵氏は<記憶>の捉え方を作品の読みのポイントであるとし、「<僕>に残っていた外野手と中国人の<記憶>は、<僕>がまだ自分自身に誇りを持っていた証左として登場する。この誇りを<中国>という形に置き換え、現在の不安定な自分自身がめざすべきものとする。この<記憶>をいかに位置付けるかが「中国行きのスロウ・ボート」の価値に繋がるであろう。」¹⁵と提示している。

また、「中国行きのスロウ・ボート」は短篇集『中国行きのスロウ・ボート』の表題で、作品の知名度を高めるのに役立つと同時に、村上の至極関心で、また処女短篇として自身の原像（中国人のことも内包）が注がれているという役割を果たした。さらに文中の「中国」の「虚」と「実」の問題は各評論家が関心を向けていたのである。登場する3人の「中国人」が「われわれ自身の象徴」だと思ふ阿部好一氏と<日本人>に対する他者の総体と思ふ田中実氏は「中国人」が「虚」である考えを述べたが、川村湊氏は「（前略）村上春樹は「中国行きのスロウ・ボート」では、“中国人”を、（中略）それらしい人物や挿話を律儀に登場させストーリーの整合性をつけている。だが、むしろ村上春樹的世界においてその律儀さや整合性こそが重要であることはいまでもない。」¹⁶とし、「“中国人”“羊”というコトバに「意味や形」がないはずがないし、それは「概念的な記号のよ

¹³ 青木保「六〇年代に固執する村上春樹がなぜ八〇年代の若者たちに支持されるのだろうか」（『中央公論』1983年12月号第98年第14号、271頁）

¹⁴ 川村湊「書評『中国行きのスロウ・ボート』村上春樹」（『群像』1983年8月第38巻第8号、291頁）

¹⁵ 同9、125頁。

¹⁶ 同14、290頁。

うなもの」ではなく、むしろ現実的な多様、多彩な“イメージ”を孕む実体的なものであるだろう。」¹⁷として「中国人」が「実」であると論じている。ジェイ・ルービン氏も「この短篇集の標題作「中国行きのスロウ・ボート」（一九八〇年四月）も、別の意味で村上の特徴を顕著に示している。初めての短篇は、中国に対する村上の根強い関心を暗示した初の短篇でもあった。」¹⁸と指摘している。同時に「いまでは、日本人にとってかなり厄介な記憶として、村上が中国と中国人を一貫して意識してきたと見ることができるだろう。」¹⁹という締めくくりも興味深い。

さらに、70年代には、公式の中日関係は締結し始めていたが、南京大虐殺が再び一部の教科書に載るようになったことや、80年代前半には「侵略」を否定しようとする教科書問題、戦争責任問題及び1989年には昭和天皇の死などがあった背景から、山根由美恵氏は「この「中国人」は、アジアと日本との関係のアナロジーとして、いわば、時代の象徴として描かれている所もあり、そのことを語る「僕」の意識の上に村上春樹の社会意識の萌芽が認められるのである。」²⁰という指摘をした。

本論は以上の先行研究を踏まえ、3人の中国人と出会った時代をそれぞれ<10年代>に分け、「僕」が<中国人>に対する<記憶>の変遷を考察して、またその原因を究明していく。

4. 時間構造での「僕」と村上春樹

語り手の「僕」が、記憶の中で時代に従い、小学校時代、大学時代、そして社会人時代に出会った3人の中国人に関する3つのエピソードを通し、追憶するように展開している。

1人目の中国人に出会ったのはいつか、語り手の「僕」もはっきりしていないが、「一九五九年、または一九六〇年というのが僕の推定であるが、どちらにしたところで違いはない。」(11頁²¹)としている。「僕」は模擬テストを受けるためにいつも通っている学校ではなく港町の山の手にある中国人子弟の学校というところへ行かされた。模擬テストとはいえ、別の学校で受けるという点からみれば、普通模擬テストではなく小学校卒業試験の可能性ではないかと推測できる。村上の年譜によると、6歳の1955年4月、彼は西宮市

¹⁷ 同14。

¹⁸ ジェイ・ルービン「うろ覚えの曲」『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』（畔柳和代訳 新潮社 2007年2月、76頁）

¹⁹ 同18。77頁

²⁰ 山根由美恵 村上春樹「中国行きのスロウ・ボート」論—対社会意識の目覚め—（『国文学攷』第一七三号 広島大学 二〇〇二年三月 36—37頁）

²¹ 特別な説明がなければ、本論の作品引用は全部全作品版からである。

立香榎園小学校入学したことが分かる。このことから1959年または1960年の「僕」の模擬テストは村上の卒業試験の時期ではないだろうか。つまり語り手の「僕」は村上自身であろうと考えられる。言い換えれば、1960年ごろ村上である「僕」は中国人小学校で初の中国人に出会ったのである。

2人目の中国人は大学時代にアルバイト先で知り合った女子大生で、「彼女と僕と同じ十九歳」(20頁)という設定があった。この「僕」が19歳だったのは、村上も19歳であった1968年である。村上是一年浪人した後、1968年に早稲田大学に入学したことから「僕」と同時期に大学生活を送っていたことが分かる。さらに、彼女とのエピソードの場所が東京であり、村上の大学所在地も東京であったことから同じ場所で生活していたことが分かる。

3人目の中国人は「僕」の高校時代の知り合いだったが、1977年28歳の時に再会した時には百科事典のセールスマンであった。「そのとき僕は二十八になっていた。結婚してから六年の歳月が流れていた。」(29頁)という設定と村上の年譜から、1971年22歳村上が学生結婚していることから1977年28歳の「僕」は大体、村上の80年代ごろという設定が明らかになってきた。

以上の考察から、村上は語り手の「僕」によく自身を投影していることがわかる。また、3人の中国人はそれぞれ60年代ごろ、70年代ごろ、80年代ごろという3つ時代とよく繋がっているのである。その作品は記憶の間違いもあれば、フィクションの部分もあるだろうが、エッセイとか自伝小説という感じが強いのではないだろうか。

5. 80年代までの<記憶>変遷

作品は1章～5章からなるが、1章と5章は現在の時点で2章、3章及び4章は過去の記憶について語られている。1章では現在、「僕の記憶力はひどく不確かである。」(12頁)という記述がある。そこから60年代ごろから80年代ごろまでに会った3人の中国人のエピソードを通して、回想する形式で<記憶>は「僕」の状態に従いそれぞれ提示している。

1人目の中国人に出会ったのは小学校時代の1959年か1960年どちらか確然と覚えていないが、「ひとつは中国人の話であり、もうひとつはある夏休みの午後に行われた野球の試合である。」(13頁)という2つのエピソードだけを明確に覚えている。このエピソードから小学校時代の中国人を引きだしてくれる。具体的な年は現在不明であるが、この2つのエピソードだけがあの時の記憶として「僕」の<記憶>に「鮮やかな」状態で残っているのである。中国人の話は「僕」が港町の山の手にある中国人小学校で模擬テストを受けた際の監督官である。「監督官は四十歳よりうえには見えなかったが、左足を床にひきずるように軽いびっこをひき、左手で杖をついていた。」(16頁)というような中国人である。また試験前に、日本人の「僕」を含める中日受験生たちに「みなさんもご存じのよう

に、中国と日本は、言うなればお隣同士の国です。」(17頁)、「でも努力さえすれば、わたくしたち(「僕」を含める中日受験生——引用者注)はきっと仲良くなれる、わたしはそう信じています。でもそのためには、まずわたくしたちはお互いを尊敬しあわねばなりません。それが……第一歩です」(18頁)など、中日友好関係を築こうとする内容である。このような内容は村上文学でも極めて珍しい。そこに1959年か1960年、つまり60年代ごろの「僕」の〈記憶〉の中の〈中国〉に対する像がよく表れている。1949年生まれの上村はその当時10歳ごろで、戦争から15年ぐらい経っていたが、戦争が遠くなっていったのではない。またあの頃「僕」の生活も「戦後民主主義のあのおかしくも哀しい六年間(「僕」の小学校時代——引用者注)の落日の日々」(12-13頁)と示されたように、小学校時代の生活はよかったとは言えない時期である。周知のとおり、戦後民主主義は第二次世界大戦後、アメリカ占領軍の戦後改革であり、日本の政治・社会・文化における民主主義の特徴・特質を言い表す言葉である。また、戦後民主主義は戦後という特別な背景から誕生した概念で、日本に与えた影響も大きい。そして、中国人は40歳でびっこをひいていたが、15年前は25歳ごろだったことから、そのびっこをひくことになった原因は戦争であると連想しやすい。さらに試合で脳震盪を起こしたというエピソードをなぜ正確に思い出せるかというところも一種の「傷」だからである。そのような「傷」は戦争、また中国人に関連している。つまり60年代ごろの「僕」が小さかったが、「戦争」と中国人に関連している「僕」の〈記憶〉の状態は「鮮やか」である。

「僕」が出会った2人目の中国人は「僕」と同じ19歳の女子大生だった。もともと接点が無かった彼らはアルバイトで知り合った。3週間のアルバイトが終わった日に、「僕」たちの間で楽しくないエピソードが残されている。夜10時過ぎに「僕」が山手線の駒込駅まで彼女を送り、電車に乗せるはずだったが、逆回りの電車に乗せてしまった。日本人であり、大学生活で住み慣れていたはずの東京での自分の間違いに、「僕」は「どうしてかわからないけれど、ついうっかり間違えたんだと僕は言った。きっとぼんやりしてたんだ。」(26頁)という説明がある。さらには「酒を飲み過ぎたせいだろうか？」(25頁)という自問にも否定したり、「「わざと間違えた電車に乗せたわけじゃないんだ」(28頁)と僕は言った。」という説明があるため、このことは「僕」の〈記憶〉が混乱したからこそ、そのようなミスをしたという設定になったのだろう。〈記憶〉が混乱になったからこそ、そのようなミスをした。さらに、同じように「僕」は2つ目の過ちをした。「僕は煙草の空箱と一緒に、彼女の電話番号を控えた紙マッチまで捨ててしまったのだ」(29頁)という致命的な過ちである。作品には2つ目の過ちに対する「僕」の状態の描写が少ないが、それも「僕」の〈記憶〉が混乱していたからこそ、電話番号を控えた紙マッチのことを忘れたのではないか。従って70年代ごろ、混乱した〈記憶〉で大学生になった「僕」は中国人の彼女に対する〈記憶〉は断念の兆しを現したのではないか。「僕はぜひぶん調べてまわったのだけど、アルバイト先の名簿にも電話帳にも、彼女の電話番号は載っていなかった。大学に問い合わせしてみてもわからなかった。」(29頁)という努力の姿

を見せたが、「それ以来彼女とは一度も会っていない。」ということになってしまった。このエピソードを通して「僕」は失った彼女とともに、中国人に対する「僕」の〈記憶〉状態も積極的ではないが、次第に消えているところである。つまり70年代ごろ、彼女に対する〈記憶〉は混乱の〈記憶〉で、これは前の「鮮やかな」〈記憶〉の悪化の第一歩ではないか。

28歳になった社会人の「僕」は喫茶店で高校時代の級友に再会した。級友は「僕」が出会った3人目の中国人である。「僕」はなにも彼のことを思い出せない。しかしそれに対して、「僕」と級友は高校時代の知り合い程度の関係だったにもかかわらず、級友は「通りを歩いてガラス越しに一目見てすぐわかった」(31)というように「僕」の記憶に反して級友は鮮明な記憶を持っている。「僕」はどうしたのだろうか。〈記憶〉が悪いか。

「そのとき僕は二十八になっていた。結婚してから六年のあいだに三匹の猫を埋葬した。幾つかの希望を焼き捨て、幾つかかの苦しみを分厚いセーターにくるんで土に埋めた。」

(29頁)という鮮明な記憶の状態がある一方、級友だった中国人のことは思い出せない。少し不自然な感じがしないだろうか。原因は「僕」に潜在的に「昔のことを忘れたがっているんじゃないのかな」(30頁)という傾向があるからだ。中国人に向かって「昔のことを忘れたがる」というのは高校時代の級友のことももちろん「昔のこと」だから、忘れたがるのであろう。また、このエピソードではもうひとつ〈記憶〉の「メタファー」と思われるものが登場した。級友は「僕」と再会し、向き合って座った時、「ポケットから煙草の箱と小さな金のライターを取り出し、火をつけるでもなくテーブルの上に置いた。」

(30頁)このライターが〈記憶〉の光を明かす役割を果たしている。ここから「僕」は級友の話に従い、だんだん級友のことを思い出してきたからである。つまり、「ライター」を通して思い出せない級友の〈記憶〉が明るくなってきたということである。そして、級友が「「さて、そろそろ行くとするか」と彼(級友——引用者注)は煙草とライターをポケットにしまいこみながらそう言った。」(36頁)というところで、ここまでの作品の中で「僕」が出会った三人の中国人は全員出揃った。さらに〈記憶〉の中の中国人の回想もここで終わりに迫っている。級友は「僕」が最後に出会った中国人である。「僕が彼に言いたかったのは何か中国人に関することだった。でも僕には自分がいったい何を言いたいかをきちんと把握できなかった。だから僕は何も言わなかった。ただ月並みな別れの言葉を口にただけだった。今だってやはり何も言えないだろうと思う。」(37頁)つまり「僕」の中国人に対する〈記憶〉も級友がライターをポケットにしまい込むにつれ、光を失い、消えていったのである。つまり80年代ごろ、中国人に対する「僕」の〈記憶〉は前に続き、消えていった。

6. 消失していた〈記憶〉と遠ざかっていった〈中国〉

人間は、記憶が欠けないものである。なぜなら記憶も過去と未来を繋げる重要な役割を果たしているからである。60年代ごろ、70年代ごろ、80年代ごろ、「僕」の中国人に対す

る<記憶>は戦争で鮮明なく記憶>, <記憶>の混乱で消えている<記憶>, 潜在的に昔のことを忘れたくて消えた<記憶>という過程で, 村上はそれぞれの時代, 自分が中国人に対する<記憶>を語ってくれたのである。

60年代ごろ, 小学校時代の「僕」は戦後生まれで, 戦争から15年ぐらい経っていたが, 戦後民主主義のもとで「おかしくも哀しい六年間」の小学校時代を送っており, おぼろげな記憶しかない中でびっこをひいていた中国人の試験監督官の話と, 野球の試合で脳震盪を起こしたという「傷」のことだけ, 正確に思い出すことができている。これはみな戦争という点に関連しており, 「僕」の記憶に明らかに残っている。また, びっこをひいていた中国人の話を通して, <中国>に対する「僕」の意識は積極的に直面しているのではないかと, ということも表現できる。

さらに70年代ごろの「僕」の大学時代は, 人として価値観を形成することに極めて役立つ時期であった。しかし, 中国人女子大生と付き合っている途中で, 混乱した<記憶>により彼女との初のデートを終えて別れる際, 彼女が乗るはずだった電車の逆回りの電車に乗せてしまったことのみならず, 彼女と連絡できる唯一の手段である電話番号を控えた紙マッチまでも捨ててしまったのだ。<中国>に対する「僕」の意識は前より明らかに「後退」してしまった。そして80年代ごろ, 社会人時代の「僕」は高校時代の中国人級友のことをなにも思い出せず, また潜在的に「昔のこと」の<記憶>を忘れたい傾向もある。<中国>に対する「僕」の意識は作品の末尾を迎えるにつれ, 中国人に対する回想も終わってしまった。そのため「僕」の中国人についての記憶もここで消えていった。

70年代ごろの1968年2人目の女子大生であれ, 80年代ごろの1977年3人目(作品で最後出会った中国人)高校時代の級友であれ, 「僕」が中国人に対する記憶も意識も, 60年代ごろの1959年か1960年の1人目の小学校時代の監督官より, 淡くなり消える一方である。初出誌版の1980年, または全作品版の1990年(改訂)で, 村上はなぜ中国人を対象とし, 「僕」の消失していった<記憶>にこだわって作品を作ってきたのか。「“村上春樹的現象”とは何か?それは, たぶん「一九八〇年代の初めは, 僕らが村上春樹の本を夢中になって読んだ年代だった」と振り返られるような“時代的”な現象(それは風俗ともマス・イメージともサブ・カルチャーとも呼んでよい)を指している。村上春樹の小説は, そのコトバをめぐる作品の内部よりも, むしろその小説世界の外側のさまざまな時代的, 風俗的なイメージの輻輳性への共感によって読まれているのだ。」²²と川村湊氏が指摘したように, 時代背景に緊密しているのである。それは村上作品の顕著な特徴である。70年代ごろ, 日本人にとって第二次世界戦争は徐々に遠くなっていたようだったが, 戦争は遠く離れてはいなかった。東西冷戦の下で日本は冷戦前線に位置づけられていたからである。1960年半ばから70年代前半まで, 米国によって勃発したベトナム戦争が後期に伴い,

²² 同14。291頁

世界中で戦争反対は相次いでいたのである。しかしながら中国には、1966年から1976年まで10年続いた「文化大革命」という革命運動があった。隣国であり、東西冷戦の前線に立っていた日本が革命運動に注目していたのはごく自然のことである。それに伴い、中国に対するマイナスイメージも増え続けてしまったのである。一方、戦後の復興から経済成長を経て日本は経済強国になっていたが、「平和国家の象徴」に変わっていた昭和天皇は国民的自信を取り戻すために、1971年9月訪欧（公式訪問（ベルギー・イギリス・西ドイツ）、非公式訪問（デンマーク・オランダ）、休養（フランス・スイス）計ヨーロッパ七か国）、1975年9月訪米を実現したが、その2つの訪問を契機に天皇の戦争責任の問題が再び、議論されたのである。また1971年、中国は国連復帰確定を機に、国際地位が高まりつつあったためアメリカを始めとした多くの国は中国に対する抑制をさらに厳しくしていたのである。それと同時に国際政治環境の変化に伴い、ソビエト連邦に対抗するために1972年2月、ニクソン訪中、米中共同コミュニケを発表した後、9月田中角栄首相も訪中、中日共同声明に調印し、1974年11月、中日平和友好条約の交渉開始から、1978年8月中日平和友好条約締結に至って以後、中日関係は黄金時代を迎えて来たが、その間「戦争責任」や「南京大虐殺」などがもう一度注目され、議論されていたことが話題になってしまったのである。それに加えて1982年歴史教科書問題も厳しくなっていき、1985年中曾根康弘首相も靖国神社を公式参拝したなど、中日関係にも暗い影を落としてきた。そして1989年1月、昭和天皇の死を機に、「戦争責任」が中日に大きな影響を及ぼしてきた。ほかにも1989年6月、中国で発生した「天安門事件」も日本の知識人に影響を与えたに違いない。「日本の国内のさまざまな集団が、学校教科書から戦時中の残虐行為を抹消し、日本の中国侵略を糊塗しようとする動きを強めた、一九八〇年代の中日関係は以前よりも複雑になった。」²³。そのような流れの中で中日関係は、戦争と中国に対するマイナスイメージによって貫いてきたのである。「いずれにせよその父の回想（捕虜となった中国人兵を処刑したことなど——引用者注）、軍刀で人の首がはねられる残忍な光景は、言うまでもなく幼い僕の心に強烈に焼き付けられることになった。ひとつの情景として、更に言うならひとつの疑似体験として。言い換えれば、父の心に長いあいだ重くのしかかってきたものを——現代の用語を借りればトラウマを——息子である僕が部分的に継承したということになるだろう。」²⁴と村上自身が綴ったように、父の戦争体験により「僕」にもある程度のトラウマが引き継がれたのである。それは20年経た現在でも「死はなぜかしら僕に、中国人のことを思い出させる」（13頁）という3人の中国人に関する〈記憶〉のエピソードを回想する前の「僕」の心境と合致しているのであろう。「僕」の〈記憶〉で1人目の中国人も戦争と関連して始まり、2、3人目の中国人のエピソードも「戦争」という潜在意識

²³ マーク・アイコト著 岡田良之助訳「侵略、加害および南京大虐殺にかかわる中国の歴史学」『歴史学のなかの南京大虐殺』（ジョシュア・A・フォーゲル編者、柏書房、2000年5月、59頁。）

²⁴ 同2。253頁。

を持っており、さらに中国に対するマイナスイメージが村上に影響して設定されたのだろう。80年代ごろまで、「僕」は消しようとする中国人に関する「記憶」もその背景で〈記憶〉の消失により、中国に対する気分悪い表現ではないか。

中華料理が嫌いで、現在までに1994年ノモンハン事件²⁵の跡を辿るためだけに、中国へ行ったことがある村上としては、「友よ、中国はあまりに遠い。」(39頁)が示したように、中国行きのスロウ・ボートはあまり順調ではなかろう、ということが推測できる。

参考文献 (引用文献以外)

劉傑・川島真『対立と共存の歴史認識—日中関係 150 年』(東京大学出版会 2013. 8)

石田雄「II 戦争責任論五〇年の変遷と今日的課題」『記憶と忘却の政治学 同化政策・戦争責任・集合的記憶』(明石書店 2000. 6)

²⁵ 1939年5月から9月にかけて、満州国とモンゴル国間の国境線をめぐって発生した紛争のこと。